

「やばい」という つぶやきについて考える

社会科の授業では、岐阜県海津市の川に囲まれた特異な地形（輪中）をデジタルマップで凝視していた子供の中から、「やばい。」というつぶやきが漏れ聞こえてきたそうです。



ここでの、社会科の生きたつぶやきを、国語科の「学びのモデル」で少し掘り下げてみたいと思います。現代の子供たちにとって、「やばい」は便利で万能な言葉です。かわいいものを見て「やばー!!」、照れ恥ずかしい場面で「やばいっ…」、圧倒的な何かを見て「あれやばいな」など、ポジティブ・ネガティブを問わず、あらゆる感情をたった一言でまるごと包み込んでしまう「基礎的スキーマ」として日常に定着しています。

しかし、社会科の局面で出た「やばい。」は、単なる若者言葉の流行ではなさそうです。「もし今、ここで洪水が起きたら、この土地に住む人々の暮らしはどうなってしまうのか」という、対象の圧倒的なリスクに直面した身体的な「シミュレーション」から、自ずと湧き上がった「主観的な問い」の現れ（つまり中動的な「わきおこり」の局面）と価値付けることができそうです。

国語科の学びのモデルでは、「言葉の意味や働き、使い方等に着目する見方（鍵概念）」を働かせ、「対象と言葉や、言葉同士の関係を捉え、問い直す考え方（教科独自のアプローチ）」によって言葉への自覚を高めます。この視点から「やばい」を、「日常における生活言語の三層スキーマ」として考えてみます。

◆基礎的スキーマ

意味を区別せず、内側からあふれ出た情動（愛らしさ、羞恥心、知的な興奮など）を、ぱっと口に発しやすい単一の言葉に託している状態。

◆具体的スキーマ

「川の高さが家より高い。これは『やばい』…」と、対象（環境）と衝突し、既存の言葉では説明しきれなくなったもどかしさから立ち上がる、その場限りの動的な捉え方。

◆抽象的スキーマ

「抱きしめたいくらい可愛い」「足がすくむような恐怖」「想像を超えた驚き」と、自分の身体感覚的な手応えと言葉を合致（納得）させて、他の文脈でも最適な表現を再構築できる汎用的な言語能力。

日常における、対象の圧倒的なリアルを前にして、「やばい」と発する子供を放置しては、「自分の言葉を必死に吟味し、新しい意味を創り出そうとする国語科の本質的な学び」は、一切生まれ得なくなってしまう。子供の「やばい」にしっかりと伴走しないと、知の更新が止まってしまうという意味で、「やばい」のではないのでしょうか。



（木村 仁）